

## 人はなぜ外国語を学ぶか

西山 教行（認知情報学系）



人はなぜ外国語を学ぶのだろうか。人は社会化の第一歩として身につける母語のみで暮らすことができないものだろうか。世界を見回すならば、単一言語

の世界に閉ざされている人々も確かに存在する。しかしそれと同じくらいの割合で、あるいはそれ以上に複数の言語世界に暮らす人々もいる。

人が初めて身につける母語は「母のことば」とも「母なることば」とも考えられるが、それは実際のところ、「母のことば」であるとは限らず、「父のことば」であることや、またいずれのことばではない場合もある。さらに母語は一つとは限らない。二つ、さらに三つのことばを身につけて育つこともある。とはいえ、人が母語を身につけるとき、選択の余地はほとんどない。ところが、外国語、正確に言えば異言語を学ぶときには、何語を学ぶのか、なぜ学ぶのか、何を目的として学ぶのかなど、さまざまな問いを投げかけることができるし、それらの問いを無視することはできない。日本は英語以外の言語学習が中等教育段階においてほとんど確保されていない、世界でも稀有な国であるために、子どもたちや親は言語選択という問題に心を悩ませることが少ない。そのため、はじめて外国語を選択するという経験は、多くの場合、大学入学時となるのだが、近年は英語以外の、いわゆる第2外国語を必修科目として課さない大学や、さらにその選択肢まで奪ってしまった

大学が増えているために、日本人が主体的に外国語を選択する機会はますます減りつつある。

日本社会にあって、外国語、とりわけ英語を学ぶ動機や目的はあまりにも自明に映るためか、これは私たちの意識にあまりのぼらない。とはいえ、初等教育段階から国民全員が英語のみを今後10年近くの間学ぶ意義や、その費用対効果がどのくらいあるのか否かはあまり、論じられていない。言語教育や学習はその効果が社会的に実証されるまで相当の時間を必要とするために、長期的戦略が求められるのだが、現代日本社会の多くの領域で長期的戦略を練り上げる文化は依然として創られていない。それよりも私たちの関心の大半は、英語をどのように学ぶかといった学習法や教授法に向かってしまう。このような思考回路では、英語が入試全般に組み込まれているという現実が、学習の主要な原因になる。そしてひとたび大学に入学すれば、卒業単位に編入されているから必要だ、さらに社会人となれば、昇進のために必要だなど、私たちは何らかの社会装置のために外国語学習を意義づける。

大学のカリキュラムに外国語教育、とりわけ英語教育が統合されているのは、学生が国際人となる上で英語が必要であるとカリキュラム策定者が漠然と考えているからではなく、大学という社会制度の再生産を狙うだけでもない。本学のような研究型大学は、外国語を専門的学術知識の獲得に必要な道具と位置づけていることから、外国語の学習を不可欠と考えて、必修科目とする。ただし、英語があらゆる学術に万能の特効薬だと思っ

ならない。それぞれの学問には成立の歴史があり、特定の言語文化から生まれ、その環境に育まれたものも少なくない。言語文化という環境は学術文化に何らかの影響を及ぼす。数学者のカルノはフランス語で、植物学者のメンデルはドイツ語で、電気学者のマルコーニはイタリア語で思考を究め、独創性を発揮し、学芸の発展に寄与した。単一言語による思考のみが世界を席卷してきたわけではない。

外国語の能力は研究だけではなく、職域に応じて必要となることもある。日本では、幸いなことか不幸なことか、外国語の能力を不可欠とする職業はきわめて少ない。かえって具体的ニーズが曖昧であるからこそ、日本人は好んで外国語を学び、外国語を使用する職業に従事したいとあこがれるのだが、その一方には暮らしのためにやむを得ず、異言語を身につける人々もいる。かつて植民地支配に定められたがために、旧宗主国の言語を独立後も公用語とせざるを得ない国では、異言語能力が社会的上昇に不可分となっている。「移民庁」の設置が政治日程に上りつつある日本社会において、日本語という異言語を私たちはどのように構想することができるのだろうか。移民の優れた日本語能力に出会ったからといって、手放しで喜んでよいものだろうか。そこには思いがけないドラマや葛藤が秘められていることを忘れてはならないだろう。

とはいえ、外国語学習を社会制度や必要性の中だけにのみ、閉ざしてはならない。母語以外の言語を学ぶことは何よりもみずからの人間性をひらく営為であり、異なる言語文化に身を置くことは「自分とは何であり何でないかを感じる」(セガレン『〈エクゾティスム〉に関する試論』) 最良の教育となる。フランス人作家セガレンは異文化との相克の中に「フランスなるもの」の解体と脱出をくわだて、これにより異言語学習の極北を示し、他

者の中に「永久に理解不可能なものがある」と断言する。またフランス共和国の元首相ドヴィルパンが他者性への扉としての多言語主義を訴え、他文化への渡し守となる言語の価値を唱えたのも記憶に新しい。

私の関わる外国語教育学や言語政策といった新興の学問分野は、社会の中で言語がどのような役割を果たすものか、社会は言語にどのように働きかけるか、また言語は社会にどのような作用をもたらすのかなど、マクロの視座から言語と社会の関係を追究する領域といえる。外国語教育には、個人の内部で学習がどのように形成されるのか、教室でどのように学習するのかといったミクロレベルの問題意識だけではなく、学校や社会、あるいは世界の中で言語とどのように関わるのかといったマクロの課題もある。

これは、20世紀後半に生まれた、構築途上の分野であり、実践との協働が欠かせない、ダイナミックな領域であると確信している。

(にしやま のりゆき)